

都道府県別賞一等

お守りと贈り物

愛知県 名古屋市立神丘中学校 一学年

富安 柚月

中学校、はじめての定期テストが終わった春の日。テストが終わり心が軽くなって家に帰ったら、母がリビングの片隅で一人、泣いていた。世界中を旅して、私の知らないことを面白おかしく話してくれる、知識豊富でやさしい祖父が亡くなったのだ。ゴールデンウィークに入院中の祖父の病室に会いに行ったら、ばかりだったので、急すぎて実感がわかなかった。最後に祖父に会った時、

「中学はじめてのテストで緊張する！」

と私が言ったら、祖父が小さな声で

「テスト、頑張れよ。柚月が高校に入るまではじいちゃん生きていたいなあ。柚月、英語をしっかり勉強して、そのあとはスペインに行ってスペイン語を学ぶと世界が広がるぞ！」

私はその言葉をずっと忘れられない。自分の体のことよりも、私の未来や夢を真剣に応援してくれていた祖父の姿を思い出すと、今でも胸が熱くなる。

祖父は去年の十二月から入退院を繰り返して手術も何回かしていたので、私も何となく祖父の体調が悪いことは知っていた。会いに行くたびに日に日にやせていく姿を見るのはとても辛かったが、祖父は長期にわたる入院で自分の入院費・手術費を心配していた。祖母にそのお金を支払ったか、たびたび尋ねていたようだ。ただ、祖父は生命保険に入っており、入院・手術保障と死亡保障がついていたため、そこから数回の手術と入院費用、葬儀費用が支払われることになった。この保険は、祖父が生前に家族のために自ら加入してくれていたもので、私たち遺族にとって生命保険は亡くなった人からの「贈り物」のような気がして、私は悲しさと寂しさの中、亡くなった祖父に少しでも触れた気がして心が温かくなった。

また、保険があったおかげで、祖父の死を受け入れ悲しむ余裕ができた。もし、保険がなければ、家族は入院・葬儀費用の準備に時間がとられ祖父をやさしく見送ることはできなかったかもしれない。

「死」。正直、考えることさえ怖くてずっと避けてきたものだった。私はこの経験ではじめて「人の死」が身近に感じられたのと同時に「死」はいつか自分にも訪れることを思い知らされた。私は祖父の死をきっかけに、生命保険に興味をもち、調べてみた。

まず初めにどれくらいの人が生命保険に加入しているか調べたが、全体では

約九割の人が加入しているのに対し、二十代ではなんと約五割の人しか加入していないということが分かった。このことから、若い人たちはあまり生命保険について意識がないのかなと思った。

たしかに若い人たちは今までの私のように死についてあまり意識がないのも無理はないと思う。なぜなら、体も元気で健康なら生命保険にお金を払うよりも自分の娯楽にお金を使いたいと思うのが当然だからだ。事故や病気などの万が一のことは自分のこととして意識しづらいのであろう。

しかし、万が一のことは絶対に起きないとは限らない。例えば、道を歩いていて車にひかれたら……。例えば、病院で急に腫瘍があると言われたらどうだろう……。実際、我が家でも、私が小学一年生の時に母の子宮筋腫が見つかり、入院手術をすることになった。その間は家事ができなくなり、父は仕事もあつたので混乱していた。家族の誰一人として欠けても普通の生活が送れなくなってしまう。もしも、亡くなってしまったら、なおさらだと思う。

「生命保険はもったいない。」そう思う人も多いかもしれないけれど、自分の身に何か起きた時には自分にとって役立つし、残された大切な家族に安心を残すこともできる。

私は今回祖父の死を体験して、生命保険は生前は「お守り」になり、亡くなった後は遺族への「贈り物」になると実感した。このように考える機会を私に与えてくれたのも博識な祖父からの「贈り物」なのかもしれない。